

2008年 平泉世界遺産入りに赤信号！？

－イコモス「平泉の遺産登録延期」勧告へのコメント－



800年の眠りから醒めた中尊寺蓮

はじめに

5月23日早朝、イコモス（国際記念物・遺産会議）が、ユネスコ（国連教育科学文化機関）に対し、平泉のユネスコ世界遺産入りについて「登録延期」を勧告したとの情報が駆けめぐり、関係者の間で大きな衝撃が走った。これにより、今年七月に予定されていた平泉世界遺産登録が危うくなってきた。

本小論においては、イコモス勧告を検討し、平泉の世界遺産登録の行方を探りながら、あわせて勧告に対しどのように対処していくべきを考えてみたい。

1 浄土思想というコンセプトについて

いつか来た道とはよく言ったものだ。今回、また昨年石見銀山の時とまったく同じ事が起こったと言えるだろう。昨年の石見銀山の場合は、日本自身が、冷静に判断すれば、この原因は、イコモス側の力量不足というよりは、文化庁を中心として起草した推薦書の内容に問題があったと判断すべきではないだろうか。

推薦書での平泉の中心概念は「浄土思想」であった。この浄土思想で、平泉を括る考え方に無理があった可能性が高いと私は判断する。

2006年6月、平泉にやってきたイコモスのオランダ委員ロバート・デ・ヨング氏の言葉、「浄土とは、いったい哲学なのか、宗教なのか」が、今さらながらに思い出される。

文化庁が中心となってまとめた「推薦書」によれば、「浄土思想に基づいた極楽浄土の世界をこの世に具現化することを目的として造られた・・・独特の空間」などと説明されている。

そもそも浄土思想というものが、非常に曖昧模糊とした概念である。浄土教の研究者からすれば、「浄土三部経は具体的に浄土世界が説明されている」と強弁するかもしれない。しかし問題は、イコモスの委員のような遺跡や考古学の専門家が、首を傾げざるを得ないような難解さを持っていることを、軽く見ていたことがあったのではないだろうか。

もしも「平泉は浄土世界の具現化」と言うのであれば、まず「浄土とは何かを」説明しなければならない。しかしながら、推薦書を見る限り、浄土信仰と浄土世界の明確な説明は、私が理解する限り、明確に説明されているとは思えない。つまり今回イコモスがいの一に指摘した世界遺産としての「顕著な普遍的価値の証明」が不十分との言葉は、換言すればイコモスが「平泉の景観のどこか浄土思想なのか分からない」と言っていると関係者は素直に解すべきである。

2 イコモス「登録延期」勧告の概要

以下具体的に、今回のイコモスの指摘を虚心坦懐に読み解いていくことにする。

イコモスの今回の指摘を列挙すれば以下の7点である。

- 「(1) 全体の配置と浄土思想の関連をめぐる普遍的価値の証明が不十分
○平泉全体の配置と庭園群との間における浄土思想との関連が「失われた文化的伝統または文明の存在を伝承する物証として稀有(けう)の存在」であることを証明しきれていない
- (2) 平泉の景観が傑出した空間造形であるとする証明が不十分
○平泉の景観が「人類の歴史上の重要な階段を物語る見本」であることが十分に証明できていない
- (3) 骨寺荘園遺跡の空間配置と浄土思想の関連についての証明が不十分
○骨寺村荘園(農村景観)が、「人間とその環境の相互作用の例外的な事例」であることを十分に証明できていない。荘園の地域は中尊寺の経蔵に関係しているが、その空間配置に浄土思想が反映されていることを十分に証明しきれていない
- (4) 平泉の浄土思想が世界的意義を有するものであるとする証明が不十分
○史料等により、平泉と浄土思想との関連性が国家的な重要性を越えるものであることを十分に証明しきれていない
- (5) アジア地域における平泉遺跡の普遍的価値の比較研究が不十分
○(アジア・太平洋地域での同種遺産との)比較研究は推薦資産の世界遺産一覧表への記載を検討するのに十分でない
- (6) 推薦資産の範囲について再検討すべきとの提言
○浄土思想の観点からの推薦資産の範囲について再検討が必要
- (7) コアゾーンとバッファゾーンの整理が不十分
○推薦遺産は個々の構成資産間の空間的つながりを含む文化的景観の総体というよりも、個々の構成資産に限定されており、推薦資産の主題と推薦資産・緩衝地帯の区分の在り方との関係について整理が不十分」(毎日新聞 地方版 5月24日をベースに佐藤がタイトルを附したもの)

以上の7項目の指摘を見て、まず思ったのは、第一に「浄土思想」という難しいキー概念を最初に導入したことで、ボタンの掛け違えが起こったこと。第二に各地域の要望などを取り入れ過ぎたためか、本来なら、入るべきでない地域がコアゾーンとして推薦されていることが上げられる。

そもそもイコモスは、歴史学、建築学、考古学などの専門家集団である。推薦書のどこにどんな矛盾があり、その証明が破綻しているか、推薦文と現地調査によって、明確に判断されたものと考えべきだ。今回の「登録延期」の勧告について、世界遺産総合研究所（広島市）の古田陽久所長は、「限りなく不登録に近い登録延期。推薦書をやり直せというのに近い」（読売新聞5月24日）との見方を表明しているが、私も同感である。

3 平泉は浄土思想で一括りは無理だった！？

では具体的に、イコモスの指摘について検討してみる。

第一の指摘「全体の配置と浄土思想の関連をめぐる普遍的価値の証明が不十分」は、今回のイコモスの見解の総論的な意味を持つものと考えられる。はっきり言って、「浄土思想」でまとめようとした推薦書のコンセプトそのものが、矛盾していることを、イコモスは、いの一歩に、「これではダメ」と言っているのである。

まず、推薦書の9箇所の遺跡で、浄土思想で括れない遺跡の存在が目立つことだ。中でも、安倍氏時代の遺跡としての衣川地区「長者ヶ原廃寺跡」や同じく安倍氏の砦の跡である前沢地区「白鳥館跡」は、浄土思想とは縁もゆかりもないとしか言えないものだ。とりわけ、「白鳥館跡」については、平泉の遺跡や歴史について相当詳しい人間でも、首を傾げたくするような、コアゾーン入りであった。また厳しく言えば「達谷窟遺跡」についても、歴史的に言えば、浄土思想で括ることは無理があると言わなければならない。

選ばれた9つの遺跡について、その遺跡を通底する概念は、「浄土思想」というよりは、先住民の民の流れを汲む奥州勢力（安倍氏・藤原氏）と畿内政権（大和朝廷）との間の「抗争と平和の歴史遺跡」というべきかもしれない。奥州藤原氏初代清衡は、二度と奥州と畿内政権が敵味方となって抗争を起こしてはならないとの、非戦の誓いを立て、中尊寺を中心とした平和の都市を「平泉」として開いたのである。

その意味で、作家の高橋克彦氏は、イコモスの勧告を聞いて『「滅ぼされた側の歴史」という問題が、ここに来て改めて浮かんだと感じた。』（朝日新聞 岩手版 5月24日）と言われたそうだが、確かに一理ある。京都や奈良の寺院との違いを明確に示すためにも、この観点は必要だったかもしれない。要するに「浄土思想」では、肝心の清衡の平和の祈りを込めて開創したという”政権宗教都市”「平泉」の視点がボケてしまうのである。

少しばかり、歴史を遡ってみよう。奥州藤原氏初代藤原清衡（1056-1128）は、前九年・後三年の役（1051-1087）というほぼ40年に及ぶ争乱果てに、運命のいたずらのようにして最後の勝利者となり、奥州の政治権力のトップの座に上り詰めた。清衡は、戦乱によって疲弊した国土と人心を何とか立て直そうと考えた。

平泉世界遺産入りに赤信号！？(イコモス勧告へのコメント)

2008年6月6日
平泉を世界遺産にする会

その時、きっかけになったのが、一人の僧侶との出会いだったと推測される。名を自在坊「蓮光」という。あの大長寿院（二階大堂）の住職で、初代経蔵別当となる人物である。どのような話をしたかは、不明であるが、中尊寺の寺院の創建や清衡の事跡から、およそのことは想像がつく。清衡が、豊田館（奥州市江刺区）から、平泉に居館を遷したのが、康和1（1099）頃とされる。

その後、清衡は、中尊寺に、長治二年（1105）最初院（多寶寺）を建立。続いて嘉祥二年（1107）大長寿院を建立した。この二階建て阿弥陀堂は、高さが15mもあるもので、平安時代最大の阿弥陀堂と言われる。何しろこの内陣には本尊に高さ9mの阿弥陀如来座像一体とその周囲に4、8mの阿弥陀像9対が並んであった。この寺の創建の意図は、敵味方双方の戦死者の供養にあった。この居並ぶ阿弥陀仏の壮観さに驚き感動した源頼朝は、この寺を模して鎌倉に「永福寺（ようふくじ）」を建立した。

清衡は、以上、戦争で疲弊した奥州の国土と人心を癒し恒久平和の世界へと導くために、「阿弥陀の教え」（浄土思想）の教えに従って、浄土のイメージの景観をこの平泉の地に建設したのである。この清衡の建都の思想は、中尊寺に遺されている「中尊寺落慶供養願文」（重文）として結実している。この願文には、あるゆる人々を平等に扱い、二度と戦争の惨禍がこの地に及ばないようにとの祈りが込められていた。この祈りこそ、ユネスコ憲章の前文にある「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」の先駆けとなる非戦の思想が包含されているのである。つまり平泉は、人々が、皆平等に平和裡に生きる権利があることを観想（イメージ）する風景の都市なのである。

また政治家としての初代清衡は、奥州の特産物としての黄金を最大限に活用し、中国から經典を輸入し、僧侶を平泉に集めて、書写させるなどした。また清衡は、南の白河の関から平泉を経て一三湊までに至る官道を整備し、その道一町（108m）毎に阿弥陀を記した笠卒塔婆を立てて道標とした。陸の道ばかりではなく、海道も整備し、畿内から石巻を経由して大河北上川を遡って、平泉に至る海の道を整備したと考えられている。もちろん日本海側の酒田港や一三湊から畿内や朝鮮半島や中国に至る海道があったことだろう。戦争を否定し、恒久平和を祈念し、商業や貿易を奨励した清衡の大胆な経済政策は、日本中の意欲ある人間を平泉に集めることになった。後に金売吉次と呼ばれる金商人の伝説なども、こうした清衡以降開かれた都市平泉の繁栄から、出来上がったものである。

奥州平泉の繁栄は、日本の歴史において、現在の言葉で言えば、地方分権の始まりであり、この平泉と同じように、京都政権からの地方独立の流れと考えてもよいのではないかと、思われる。

結局、今回のイコモスの「登録延期」勧告の最大の意味は、「浄土思想」というものでは一括りにできない「平泉文化」というものを、ズバリと指摘していると見るべきと思うのである。

4 往時「平泉の景観」は水の都のイメージだった！？

第二の指摘は、平泉の空間造形に対する疑問である。推薦書では、確かに「平泉には。自然地形と環境を存分に活かして、日本独特の意匠・技術を用いて浄土世界を表現した寺院建築や庭園など、傑出した空間造形の作品群が生まれた」としている。しかしイコモスは、これが「人類の歴史上の重要な段階を物語る見本」とすることに対し、それが十分説明されていない、と見ているのである。

さて、宗教都市「平泉」のグランドデザインについては、中尊寺落慶供養願文に次のような記述がある。

「・・・吉と占いに出了た土地に、堂塔を建て、純金を溶かして、佛経經典を書写させた次第です。経藏、鐘樓、大門、大垣などを建て、高い所には築山を施し、窪地には池を掘りました。このようにして(平泉の地は)、「龍虎は宜しきに叶う」という「四神具足の地」となりました。エミシも仏善に帰依することになり、まさに、この地は、諸佛を礼拝する靈場というべきではないでしょうか。(後略)」(現代語訳は筆者)

まず、清衡が、平泉という土地に政権都市を遷した理由が、ここに述べられている。吉凶を占って吉と出た土地が平泉だったということが、ここで明かされている。つまり豊田館から平泉に都を遷した理由は、占い(易)によるものだった。周知のように卜占(ぼくせん)による、吉土の選定は、中国からやってきた風水思想である。それによって、清衡は、平泉の自然地形をそのまま活かしながら、この地を「四神具足の地」にしようとしたのである。具体的に言えば、祈りの中心を関山中尊寺に置き、そこに堂塔伽藍を建立し、その麓の東に政庁平泉館を建設した。以上を以て、平泉は、まさに「四神具足の地」の靈場となったと、清衡は「願文」の中で語っているのだ。

周知のように、「四神具足の地」に比定される配置とは、東に青龍、西に白虎、南に朱雀、北に玄武を構えるような空間造形を言う。平泉に、これを当てはめると、青龍は東に流れる大河「北上川」、白虎は、西に延びる官道「奥大道」、朱雀は大泉が池を持つ「毛越寺」、玄武は関山「中尊寺」と考えられる。

さて、ここに「浄土思想」とは異なる「四神具足の地」の考えが平泉建都の思想には入っていることが明らかとなった。平泉の遺産について、真正性の証明は、この点において、誰が読んでも不十分と言わざるを得ない。つまり平泉の最初の空間配置(グランドデザイン)は、浄土思想というよりは、中国の風水思想に基づいて出来上がったものと考えられるのである。

おそらく、推薦書の起草においては、「浄土思想」を統一コンセプトとしていることから、読み手の混乱を考えて、意識的に風水思想の考え方は空間設計は盛られず、「日本独特の意匠・技術を用いた」と推測される。しかし今回のイコモスは、推薦書における空間造形について、証明にはなっていない、とこの欠陥を突いたもので的確な判断だと思われる。

結局、今回の推薦書そのものが、余りにも「浄土思想」というものに拘泥し過ぎたところに最大の問題があったと思うのである。何故、この中尊寺落慶供養願文に明記された「グランドデザイン」をそのまま、推薦書に引用し、真正性の証明を計らなかったのか。

さて、ここで、もうひとつ、当初の平泉のグランドデザインと現在の平泉の景観との矛盾点を指摘しておこう。推薦書には、「平泉には、自然地形と環境を存分に活かして・・・傑出した空間造形の作品群が生まれた」とある。しかし今、当時の平泉の景観と現在の平泉では、根本において、思想の違いとも言えるべき変節があることを指摘しないわけにはいかない。

それは、北上川という大河の畔にあって、北に支流の衣川、南に太田川を結界として、随所に池を配置し、さしずめ水上都市の景観があったと想定される。例えば、平泉の政庁柳の御所(平泉館)の東にはすぐに北上川の流水を受け止めるように猫間が淵という淵が存在し、自然の地形

平泉世界遺産入りに赤信号！？(イコモス勧告へのコメント)

2008年6月6日
平泉を世界遺産にする会

をそのまま活かした景観が拡がっていた。考古学者の前川佳代氏は、往時の平泉は、苑池的都市構造があったと次のように指摘している。

「都市平泉の一面は、四神相應の地を選び、浄土思想や自らの理念に基づいて創り上げた広大な苑池空間である。(中略)平泉の苑池は、北は関山、東は北上川、南は太田川に囲まれた範囲(平泉中心区)で、中尊寺境内はもちろんのこと、金鶏山や塔山を背景に、花館廃寺と花館溜池、鈴沢池、毛越寺、観自在王院、無量光院、柳之御所、伽羅御所などが散在している景観をいう。(中略)平泉の苑池の意義は、浄土・神仙世界の具現化、そして王城鎮守という意識であったと考える。(後略)」

(「平泉の苑池」平泉文化研究年報 第1号平成13年3月31日岩手県教育委員会)

しかし現在、この苑池的都市のような景観は、失われてしまった。それは近代工法に基づく、治水の考え方で、水を堤防で防いで、平泉周辺を、コンクリートによって固めてしまっているからである。およそ、支流の太田川、衣川はもちろん、北上川に至っては、バイパスと堤防を兼ねて計画された「平泉バイパス」によって、川道も東に100mばかり、付け替えられる状況である。現在も進められている衣川の巨大な堤防など、「自然地形を活かした」などとする推薦文の文言が恥ずかしくなるような有様だ。

このような平泉の治水思想の変節は、世界遺産としての平泉の価値を自らで否定するようなものであり、清衡の「中尊寺落慶供養願文」に盛られた平泉とは、かなりの差があることを指摘しないわけにはいかない。関係者は、まずこのような過剰な開発思想が、ユネスコ世界遺産条約の精神と根本から相違していることを、理解することから始めるべきである。今回のイコモスの「登録延期」勧告にも、多分にこの平泉周辺の過剰な開発に対する懸念が、盛り込まれているとみるべきである。

ともかく、往時に存在した苑池的都市の景観を復活させるための中長期的な計画と展望のようなものを推薦書にも、何らかの形で盛るべきではないかと思うのである。

5 骨寺は浄土空間か否か？

第3番目は、骨寺荘園遺跡についてである。

推薦書を見ると、骨寺遺跡については、次のような説明がなされている。

「平泉の周辺地域に当たる骨寺村では、中尊寺経蔵別当領の荘園が置かれて以来、小盆地に水田耕作と農家・寺社が孤立分散する村落の居住の形態が、近世・近代を通じて大きな変化を受けることなく緩やかな発展を遂げ、極めて良好な農村の文化的景観として継承された。土地利用の基本形態や景観の特質を示す諸要素は14世紀に描かれた絵図との照合が可能であり、世界的に見ても比類のない価値を持つ。」

見ると、ここには、浄土という言葉は、ひとつも使用されていない。したがって、ここでイコモスは、明らかに推薦書の盲点を突いていることになる。確かに骨寺に関しては、推薦書にある通り、中世に描かれた絵図二枚が存在し、鎌倉時代の正史「吾妻鏡」にも、文治5年(1189)9月、頼朝が、この中尊寺領を、安堵したドラマが生々しく記されてるなどしている。そして、中尊寺の経済的基盤の一端が具体的に説明できることによって、骨寺という農村の持つ歴史的価値が高いことは分かる。

ところが、問題は、推薦書が、遺跡全体に「浄土思想に基づく文化景観」との看板を掛けたことによって、9箇所のコアゾーンのすべてに、イコモス側は、この看板の証明を要求し、「骨寺のどこが、浄土的景観なの？」ということになってしまっているのである。

そして、イコモスは勧告書において、「荘園の地域は中尊寺の経蔵に関係しているが、その空間配置に浄土思想が反映されていることを十分に証明しきれていない。」としている。

骨寺の空間配置について、イコモスが、どこに浄土思想の配置があるのか、との証明については、さほど難しいことだとは思わない。この農村景観にも、間違いなく、西方浄土の思想は存在する。それは、まず骨寺の配置が東西に細長い楕円形の盆地であること。そして現在の駒形根神社がある辺りに存在したとされる六所宮を里宮（遙拝所）として、やや南西の彼方に霊峰栗駒山を、そしておよそ2キロの距離にある北西に位置する山王窟を望む位置にあること。この配置は、無量光院に立って、左に金鶏山を、右に関山中尊寺を拝む配置と酷似している。つまり、六所宮は、栗駒山と山王窟に周辺に沈む日輪を拝む浄土的配置があったと考えられるのである。

世に、「山越阿弥陀図」というものがある。阿弥陀様が西の山間からヌッと巨大な顔を出してこちらをしっかりと見ている構図で、阿弥陀様のみを描いたものと阿弥陀三尊を描いたものなどのバリエーションがある。この阿弥陀様は、比叡山で恵心僧都が感得した阿弥陀様といわれるものだ。このイメージが、この骨寺には、ピッタリと当てはまると考えられる。

中尊寺に遺されている往時の骨寺を描いた二枚の古地図「骨寺村絵図」も、西を上方にして最上位に栗駒山（駒形嶽）として、手前に山王窟、六所宮、そして下方に田園の順に描かれている。この絵図自身が、一種の浄土思想に基づく浄土を観想する装置のようにも、映る。

さらに、本寺の南に逆柴山（さかしばやま）があり、その丘陵に慈恵塚（じえづか）がある。これは「撰集妙」（1250年頃の成立か？）にも記されている仏教説話だ。信心に目覚めた一人の娘に、慈恵大師（じえだいし）の髑髏（されこうべ）が、法華経を説くという奇談である。

慈恵大師（912-985）は、天台宗の座主だった人で、慈覚大師円仁が持ち帰った浄土信仰を受け継ぎ、これを弟子の源信に伝えた高僧だ。源信（942-1017）は、往生要集（985年成立）を著し、日本における浄土信仰の普及に大きな貢献をした。この慈恵塚から西方を望むと、骨寺荘園絵図そのままの西方に浄土を望む景観を目にすることができる。円仁→良源→源信と受け継がれた浄土信仰は、間違いなく、奥州の地に位置した骨寺でも存在していたのである。そして西に日が沈む光景を見ることによって西方浄土を観想する装置として荘園内の寺社は空間配置されていたのである。

こうした説明を、イコモス側にすることによって、骨寺荘園遺跡の世界遺産入りの証明は、容易にできると考えられる。

但し、私は骨寺の価値は、また別のところにもあると考える。それは中尊寺の荘園であったものが、奥州藤原氏が鎌倉勢力によって一瞬のうちに滅ぼされ、中尊寺も、その領地であった骨寺の農村も強奪されかけた時、勇気ある中尊寺経蔵別当蓮光が、その所有権を源頼朝と直談判することで、この領土を安堵させ、そのまま農村の所有を認めさせたことに意味があったと考える。

ここには、中世日本において、既に土地の所有権についての法が存在し、また武家側にも、何

らかの遵法精神が存在したこと、同時にそこには収奪される一方だった東北地方にも権利意識が芽生えていたことを物語るものであること。考えて見れば、それは地方分権の先駆けのような意識ではなかったかと推測されるのである。その意味で、その中世の農村の景観が、ほとんどそのままの姿で保持されている骨寺の価値は、浄土思想云々の問題を越えて普遍的なものがあると思うのである。

6 浄土思想の源流はギリシャか！？

続いて第四に「史料等により、平泉と浄土思想との関連性が国家的な重要性を越えるものであることを十分に証明しきれていない」とのイコモスの指摘がある。

さてこれについて、私たちは、「浄土思想」というものが、仏教の部派仏教から発したもので、アジア特有の考え方であるという前提に立って、平泉の遺産について、さまざまな証明を試みている。しかし、少し視点を変えて、世界史的な視野を以て、俯瞰（ふかん）すれば、実は「浄土思想」と極めて似た思考は、西洋にもあることに気付かされるのである。このように視点を変えることで、世界遺産登録へ向け「浄土信仰に基づく文化景観」としての平泉の普遍的価値の証明が、これまでに比べ容易になると思われるのである。

そこで、この節では、批判を怖れず、浄土信仰の源流が、実は西洋文明の発祥地とも言えるギリシャにあったのではないかとする説を検証してみたい。

ドイツのロマン派の巨匠ベートーベン（1770－1827）に、有名な第九交響曲がある。20世紀屈指の大指揮者カラヤン（1908－1989）は、ソニーなどが、開発したCDの企画にアドバイザーのような立場で、CD一枚の録音時間を決める際、「第九の全楽章が入るほどのが良い」として75分ほどのMAXに決まったという話は有名だ。

その第九の最後に「合唱」があり、大体CDのクレジットには、「合唱付き」と表記される。周知のように、ベートーベンの最高傑作というよりも、人類の共有財産とも言うべき、楽曲だ。この最後の楽章において、自らが心酔する作家シラー（1759－1805）の詩「歓喜に寄す」を自らで再構成し、最近では、この合唱曲を、EUの国家にしようとの動きもあった。

その歌の一番は、次のような歌詞が並ぶ。

歓喜よ、美しい天上の火花よ
至福の園エリジウムから来た娘よ
私たちは炎に酔いしれて
聖なる人、あなたの住まいし聖殿へ飛び込むのだ
あなたは神秘なる力をもって
この世の時なるものが仮借なく分け隔ててしまったものを
再び結びつけてくださる
さすれば全人類はあなたの柔らかな翼の下に抱かれて
みな兄弟となる
(日本語訳は筆者)

この「至福の園エリジウム」について、考えてみる。ドイツ語の原文「Tochter aus Elysium」である。これを日本語に直訳すれば、「エリゼウムからの娘」となる。英語訳すれば「Daughter of

平泉世界遺産入りに赤信号！？(イコモス勧告へのコメント)

2008年6月6日
平泉を世界遺産にする会

Elysium) (エリゼウムの娘)である。この Elysium の語源は、ギリシャ語の「Elyision」(エリュシオン)である。これがラテン語の「Elysium」となり、ドイツ語に転用され「エリジウム (Elysium)」となったものと考えられる。

そして意味は、「極楽」、「極楽浄土」、「至福の島」、「仙境」などと訳される。フランス語読みでは「Elysee」で、「エリゼ」と発音される。現在のフランス大統領官邸が「エリゼ宮」であり、並木道で有名なシャンゼリゼ通りは「Champs Elysees」で、まさに「エリゼの野」(エリュシオンの野)ということになる。

ギリシャ最古の英雄叙事詩ホメロスの「オデッセイア」は、「エリュシオン」(エリゼウム、エリゼ)について、「遙かなる世界の涯、エリュシオンの野に送られるであろう。」(岩波文庫版、松平千秋訳「上」第四歌 P 111)と書いている。

この地は、世界の西の果てにある楽園で、神々の意思に添った生き方をした人々、特に英雄たちが、死後に於いて、至福に満ちた生活を送る場所とされる。ギリシャ神話では、死者の行く世界を「ハーデース」(冥界)と呼ぶが、エリュシオンは、「楽園」あるいは「楽土」と解釈されるのである。

おそらく、ギリシャ神話に反映したこの「エリュシオン」の思想は、シルクロードを通じてインドにも伝わり、「エリュシオンの野」の発想が、仏教に集合して浄土教(阿弥陀信仰)が生まれた可能性が高いと思われる。つまり、浄土信仰は、西洋文明の源流としてのギリシャの「エリュシオンの野」のインダ的展開ではないかと思うのである。

さて、そこで平泉の浄土思想の特徴について、主張すべきは点は、中尊寺経(正式名称;紺紙金銀字交書一切経;こんしきんぎんじこうしょいっさいきょう)の誕生のエピソードを、説明すべきではないかと思う。初代清衡は、中国の五台山に、莫大な黄金を持たせた使者たちを送り、中尊寺経の原典を購入したとされる。そしてこの事業を、中尊寺経蔵別当蓮光に託したのである。九年間(1117-1126)をかけて、この一大文化事業は成就したのである。

ところで、中国山西省五台县にある五台山は、文殊菩薩の住地とされる聖地であるが、その昔、慈覚大師円仁(794-864)が、中国に渡った時(840)、ここで、浄土思想と出会っている。五台山には、竹林寺という浄土宗の寺があり、円仁が、西方極楽浄土に、阿弥陀如来を心に念じ、10日間の念仏修行をしたところである。つまり、五台山竹林寺は、天台宗の浄土思想のルーツとも言うべき聖地なのである。毎年、正月明け、毛越寺の常行三昧堂で行われる常行三昧供は、この時、円仁が五台山から持ち帰った念仏の修法そのものの流れを汲むものである。

ところで、完成まで丸九年を要した中尊寺経について、中尊寺落慶供養願文(1126)には、このような説明がある。

「金書に銀字一行を挟み光が交わり、紺紙に玉軸衆寶を合わせて巻といたしました。漆の匣(さや)で巻を包み、螺鈿(らでん)を刻むんで、これを題目に鏤(ちりば)めました。」(筆者訳)

この完遂を寿ぐために、中尊寺で大法要が営まれたのである。平泉を埋め尽くすほどの人々が、街を行き交い、平和を祈念して突かれる梵鐘の音が、山内に響き、人々は奥州に生まれつい

平泉世界遺産入りに赤信号！？(イコモス勧告へのコメント)

2008年6月6日
平泉を世界遺産にする会

たことをこの日ほど、誇らしく思ったことはなかったろう。

山内で盛大に営まれた法要では、千人の僧たちが、一人ずつ、一人一部ずつ唱和し続ける。またその隣では、530名の僧が、書写したばかりの中尊寺経を持ち、軸の紐を解いて題名を参列者に誇らしげに披露をする。その数、何と5千数百巻に上った。気が遠くなるような話だ。

実際、この中尊寺経は、全部で5400巻ほど存在していたとされ、豊臣秀吉（1537-1598）の奥州仕置きの際に、中尊寺から經典が流出し、現在は和歌山の高野山に4300巻ほどが存在し、中尊寺には僅か15巻しか残っていないという現実がある。

この中尊寺経のエピソードの要点は、第一に奥州に存在した有り余る黄金の存在。第二に、奥州が独自の海洋ルートを持ち、中国と交易をしていたこと。第三には、清衡の信仰心の深さ。第四に、中央政府（京都の朝廷）とは独自の外交ルートを持っていた。そしてここから、第5として、これまで、とかく京都文化の模倣と言われてきた平泉文化だが、平泉という政権都市が実は、日本の中世において地方の時代の先駆けの存在であったことなど、が推測できるというものだ。これもまた中尊寺落慶供養願文の記述を丁寧に解釈することによって、なされる平泉文化の普遍的な価値の証明になると思われるのである。

7 泰衡の逃亡と中尊寺供養願文

イコモスの第5の指摘は、平泉の遺産の普遍的な価値について、国内外の同種遺産との「比較研究」が十分でなく、それによって、世界遺産登録リストへの現時点での記載は難しい、との指摘である。

この指摘については、やはりもう一度、中尊寺供養願文が、平泉の空間配置を示唆している次の箇所を解釈し直して、国内、インド、中国など、同種の遺跡との比較検討を行う必要があると思われる。

『吉と占いに出土た土地に、堂塔を建て、純金を溶かして、佛経經典を書写させた次第です。経蔵、鐘樓、大門、大垣などを建て、高い所には築山を施し、窪地には池を掘りました。このようにして（平泉の地は）、「龍虎は宜しきに叶う」という「四神具足の地」となりました。エミシも仏善に帰依することになり、まさに、この地は、諸佛を礼拝する霊場というべきではないでしょうか。』

（現代語訳は筆者）

ここでは、都を平泉と定め、そこに中尊寺を建立した意図が述べられている。尚、願文に明記されている通り、場所の選定に当たっては、中国の易と風水思想が応用されていることが示されている。この辺り、風水を応用した都市計画について研究をまとめた「風水都市」（黄永融著 学芸出版 1999年刊）のような書も出版されていることから、風水の思想で、平泉の都市景観を論じることは大いに意味がある。風水はエコロジーの先駆的な発想が見られ、平泉の都市計画における普遍的な価値の証明には欠かせないものと思われる。ここにも、浄土思想一辺倒で、全体を括るってしまった弊害があったのではないだろうか。

また平泉の都市構造について、中国北宋時代の名園「艮岳」に類似するとして、平泉の空間配置を「苑池的都市」とした考古学者前川佳代氏（京都芸術大学）の研究成果を、詳しく推薦書に

平泉世界遺産入りに赤信号！？(イコモス勧告へのコメント)

2008年6月6日
平泉を世界遺産にする会

添付すべきであった。

「都市平泉の一面は、四神相応の地を選び、浄土思想や自らの理念に基づいて創り上げた広大な苑池空間である。ここでいう「苑池」とは現代用語の庭園より規模が大きく、古代都城に付属した「苑」に類似した広大な領域に、山や池、寺や邸宅などを配置した空間を指す。」（「平泉の苑池」平泉文化研究年報 第1号平成13年3月31日岩手県教育委員会）

さらに、世界的な仏教研究者故中村元博士（1912-1999）が、その著「浄土経典」（東京書籍 03年8月刊）で語られたインド、中国、チベット、日本における文化の違い（空間デザイン）について、普遍的な価値の証明に是非引用して欲しい箇所だ。中村博士は、比較学を提唱した研究者であり、毛越寺の庭園についての言及は、注視すべきである。

「インドの極楽浄土の蓮池というものは真四角です。もともとインドのヒンドゥーの寺院には真四角の池がついていて、そこで身を清めてお参りをすることになっています。・・・そして池のまわりは階段になっています。たとえばいうと、スタジアムを真四角にして、下に水があり、そこに、蓮が咲いているというようなものです。ところが中国へ行くと、このような極楽浄土の相貌が変化して、池の縁辺のステップがなくなってしまいます。チベットでもそのような理想郷の空想は存在しません。日本では奈良時代の人々の考えていた極楽浄土は中国風であり、唐代の宮殿や庭園のすがたで想像していましたが、蓮池にはなおインドの様式をとどめていました。その典型は中将姫の伝説で有名な当麻寺の当麻曼荼羅という極楽浄土図です。

けれども、日本人はまたちがった審美眼をもてしますから、極楽浄土の蓮池というと、真四角では感じが出ない。宇治平等院のあの蓮池とか、東北でいうと毛越寺のような池、あのような不規則な、自然の景観を残したかたちになってきます。やはり日本人には日本人にふさわしい極楽浄土のすがたというものがあられるわけです。」（前掲 P17-19）

国内についても、同一種の遺跡についての比較検討は不十分だった。中でも平泉の寺院と京都の寺院について、その違いについて、明確に証明されているか、たとえば、かなり疑わしくなる。

例えば、三代秀衡が建てたと言われる「無量光院」について、それより150年以上も前に建てられた宇治の平等院との比較は不可避なテーマであるが、推薦書を読む限り、大きな文脈で読み取れば、宇治よりも、少し大柄な建物である、という以外には、明確な違いの論証はない。無量光院は、宇治の平等院を模し、仏堂の四面に「観無量寿経」の大意が描かれ、また「秀衡自らが描いた『狩獵の躰』が含まれていた」（推薦書 概要 岩手県生涯学習文化課「無量光院跡」6頁）との吾妻鏡の見解を紹介し、背後に金鶏山を拝む空間配置について、「自然環境と一体となって具現化された浄土庭園の最高の発展形態として貴重である」（前掲 同頁）と結論付けているが、極めて主観的で説得力を欠く説明というべきである。

むしろ私は、秀衡が描いたという狩獵の図を秀衡が、この無量光院の堂内という目立つ空間に何故描いたかを考えたい。そこから、この平泉という聖地が、「鳥獣人物戯画」（国宝）で有名な京都榎尾（とがのお）にある高山寺と同じく、あらゆる生き物の殺生禁断の地だったことの証拠ではないかとの発想を持つ。これは初代清衡が、政權都市平泉を開いて以降、この空間内で、戦が一度もなかったことから、伺えるのである。

ただひとつ、高館合戦という泰衡が義経を殺害するために差し向けた戦があった。義経記で

「高館合戦」と言われるエピソードである。しかしこれも、最近の考古学的研究から、義経最期の地は、川向こうに当たる衣川地区の接待館（藤原基成の居館？）との説が浮上している。当の接待館からは、柳の御所跡同様の土器などが出土し、吾妻鏡の記載にある義経最期の地「衣川館」ではないかとして、俄に注目を浴びているのである。

こうして考えてみると、清衡が平泉を開創以降に、平泉において戦争はなく、文治5年8月21日、泰衡が、政庁であった平泉館（柳の御所）と加羅御所（自邸）高屋などを焼き払ったのみで、寺社を遺し、北方に逃亡した背景には、やはり初代清衡が、中尊寺供養願文で遺した非戦の誓いがあったと考えるしかないと思うのである。

宇治の平等院と無量光院の違いについて、平等院が、やはり極楽浄土を観想するということろに重きがあったのに対し、無量光院では、秀衡自身が、自戒の念を込めて、狩猟をする武士としての自己否定をするかのようなイメージがあったのではないだろうか。しかしながら、秀衡自身も出家したとは言え、いったん事が起こったら、戦争をしなければならない。それは特に、最晩年、鎌倉の頼朝の執拗な挑発があり、敏感な秀衡は、このことを強く意識しながら、「玉葉」（九条兼実の日記）（※注）や「吾妻鏡」（鎌倉時代の正史）にあるような、源頼朝の腹違いの実弟源義経を中心とした防備の体制を固めるための戦略を息子たちに授けたとみるべきだ。

（※注）ちなみに玉葉には、このように記されている。

「ある人が言うには、去年（1186）の九月か十月頃、義経は奥州にあったが、秀衡はこれを隠して置いたという。去る十月二十九日、秀衡が死去の折、秀衡の息子たち（兄は前妻に産ませた長男、弟は現在の妻の長男である）は、融和を計り、（秀衡は）先妻に産ませた長男に、当時の妻を娶らせたようだ。そして各自が秀衡の言いつけに逆らうつもりはありませんという起請文を書かせた。同じ起請文を義経にも書かせ、「いいか、義経殿を主君として、ふたりはこれに付き従うべし」との遺言を告げた。こうして三人は志を同じくする同士となり、頼朝への対抗策を練ったと言う。」（文治四年正月九日（1188）現代語訳は筆者）

これをもって、東北大学名誉教授入間田宣夫氏（1942- ）は、「藤原秀衡の奥州幕府構想」と呼んでいる。同時代の人間の考えることは、とかくシンクロするもので、慧眼（けいがん）だと思われる。

さて、泰衡は、頼朝の執拗（しつよう）で狡猾（こうかつ）な嚇（おど）しに、ついに父秀衡の遺言を犯して、義経を衣川館（接待館？）に襲って、これを殺害する。但し、これも、聖地平泉を避け、衣川地区で、実行したということではなかったか。泰衡が、これによって平泉の清衡以来百年に及ぶ平和を守ることができると思ったのもつかの間、奥州平泉から軍事的天才源義経という重しがなくなった頼朝は、無防備都市「平泉」を攻略しようと、28万騎とも言われる兵を全国より、参集させ、意気揚々と平泉に乗り込んで来る。

頼朝軍は、白河の関を難なく越えてやってくる。平泉軍は、秀衡の長男国衡を大将として福島と宮城の県境に当たる阿津賀志山で、平泉の防衛戦に当たる。しかし平泉勢内部で鎌倉に寝返るなどの裏切りもあって、平泉勢はあえなく敗走、その中での秀衡の長男国衡が戦死する。その後は、仙台の国分原（こくぶがはら）や栗原三迫川周辺などで小競り合いのような戦があったが、100年の平和を享受した平泉は、政治的には滅亡するしかなかったのである。泰衡は、平泉に戻ることなく、部下に命じて、自邸と政庁に火を放ちながら、一方では、初代清衡が中尊寺供養願文で謳った「御願寺」としての中心地中尊寺の未来永劫の繁栄を願いながら、またその後次々に建立された毛越寺、観自在王院、無量光院などの堂塔伽藍の平穩を思い、北方に逃亡して

いったと考えることができる。

ここで、大胆な発想をすれば、泰衡は、初代清衡の「中尊寺供養願文」で発した祈りを、自分の命よりも大切な誓いとして、聖地平泉（非戦闘地域）を守るために行動したとも受け取れるのである。つまり、最後のトップ四代泰衡にとっては、中尊寺供養願文の誓いが、今日のハーグ条約（1954）であり、平泉こそは、そのハーグ条約に規定されている「無防備都市（無武装都市）」のような存在ではなかったかとも推測できると思うのである。

ともかく、平泉という都市が、清衡によって開かれて以降、一度も戦闘行為が起きなかったことは凄いことだ。またこれまで、伝承として言われてきた「高館合戦（源義経の暗殺）」の戦闘行為も、史料吾妻鏡の表記（衣川館）を裏付ける考古学的調査によって、平泉地区内ではなく、衣川地区（「衣川館（接待館？）」）であったとの説が浮上している。

さらには、鎌倉軍が、平泉に侵攻してきた時点でも、最後の御館となった四代泰衡は、清衡によってなされた可能性のある平泉での戦闘行為の禁を守ったのか、早々に平泉から北方に逃亡を図った。そのために、平泉での戦闘行為は、行われなかった。

確かに、奥州の政治の中心だった「平泉」は、これにによって消滅した。だか、清衡の中尊寺供養願文の戒は、守られた。そしてもちろん、中尊寺、毛越寺、観自在王院、無量光院など、この世に出現した美しい極楽浄土の景観もまた、黄金の輝きを放ち続けて、維持された。以上のことから、清衡が、中尊寺供養願文において、都市平泉地区を非戦闘地域（殺生禁断の聖域）として「結界」していたのではないかと、可能性があったのではあるまいか。

8 悪路王伝説のある達谷窟は平泉世界遺産から外せない

イコモス第六の指摘は、推薦書の「9つの構成資産は、すべて12世紀の北方領域において浄土思想を基調として完成した政治・行政上野拠点の諸要素として不可欠である」とした論理矛盾を突いた厳密な指摘だ。その上で、勧告書は、「浄土思想の観点から推薦資産の範囲の再検討が必要だ」と結論付けている。

確かに、誰が見ても、「浄土思想を基調とする文化景観」のコンセプトでは括れないコア・ゾーンが九つのうち、3つある。「達谷窟」（平泉町）、「白鳥館跡」（奥州市）、「長者原廃寺跡」（奥州市）である。

また先に第三の指摘にあった「骨寺荘園遺跡」（一関市）についても、その景観のどこに浄土思想が存在するのか、と疑問符を付けている。

またオランダのイコモス委員からも、「鉄塔が目立つ」として批判された「金鶏山」がコアゾーンに入ったことについても、疑問がある。いかに都市平泉のランドマークで、平泉の須弥山に見立て、経塚だったとしても、これは、毛越寺大泉が池や無量光院の借景としての役割しかなく、バッファゾーンとすべきものではないかと思う。その後、山の中央に参道を設えたりしているが、これも世界遺産としての普遍的な価値があるものとは、どう考えても無理がある。

<達谷窟遺跡>

さて達谷窟は、宮城の涌谷地区において、黄金が産出（749）以降、特に強まった畿内政権の東北侵攻の流れに沿ってやってきた、朝鮮半島からの渡来系の軍人坂上田村麻呂が、この達谷

窟窟付近に立てこもる蝦夷の族長（伝説上では「悪路王」と呼ぶ）を、この地で最終的に滅ぼし、京都の清水寺を模して、この場所に寺院を建てたと言われている伝説の地である。征夷大將軍となった坂上田村麻呂は、北への侵攻の拠点として、さらに北上して現在の奥州市水沢佐倉河の地に胆沢城（802）を築城し、多賀城から、東北支配の軍事拠点「鎮守府」を移した。

一般に、「悪路王」は、坂上田村麻呂の軍事的ライバル阿豆流為（アテルイ）に比定される。しかし場所的に、阿豆流為の拠点は、胆沢（水沢）であり、むしろこの悪路王に比定されるべきは、宮城県北の栗駒尾松地区栗原の族長だった伊治皆麻呂（生没年不詳）の可能性が高いと思われる。

この人物は、はじめ畿内政権に協力的な行動を取り、畿内政権から階位を授かり、陸奥国上治郡大領（みつのくのくにこれほりのこおりたいりょう）の地位にあったが、日頃の牡鹿郡大領道嶋大楯の差別的な言動に怒り、当の道嶋と按察使（あぜち）紀広純を殺害し、伊治城（これほりじょう）に火を放って、多賀城に迫りこれにも放火するなど反乱を起こした。これが皆麻呂の乱（777）と言われる東北の大乱だった。しかし何故か、この乱の顛末は、正史「続日本紀（しょくにほんぎ）」（文武帝から桓武帝に至るおよそ百年間に渡る編年体の正史 697-791）には記載されていない。

悪路王伝説は、この皆麻呂の乱の記憶と阿豆流為の伝承が集合したものと考えられる。しかし皆麻呂の抵抗や、胆沢の族長阿豆流為と母礼（モレ）は、地の利を活かした神出鬼没な戦法によって、坂上田村麻呂率いる畿内軍をしばしば混乱に陥れたが、圧倒的な物量を誇る畿内軍に降伏（802年4月15日）し、同年8月13日、都に連行され、河内国においてで処刑されたものである。

この達谷窟には、田村麻呂が、創建したとされる毘沙門堂がある。毘沙門天は、周知のように北方の守護神である。岩窟に張り付くように建てられた堂内に入ると空気が一変するのを感じる。この御堂は、悪路王として怨霊化する可能性のある皆麻呂や阿豆流為、母礼などの怨念をこの地に封印する意図があったと考えられる。その意味で、平泉文化が形成以前の東北人の抵抗史を知る上で、重要な歴史遺産であり、そのことを「浄土思想」で括らずに、そのまま推薦書に記すべきであった。

この宮城県北部地方から岩手県南部地方で起こった先住民たちの抵抗の歴史である皆麻呂の乱や阿豆流為、母礼らの抗争の精神は、紆余曲折を経ながらも、政権都市平泉を開く藤原清衡の心にしっかりと受け継がれているとみるべきだ。

それまで奥州とかく一方的に畿内政権の侵攻を許し、金をはじめとする資源収奪の対象だった東北の人々が、豊富に産出する黄金というものを経済的基盤として、最先端の政治体制や文化を学び、また最新の宗教であった仏教の理念を取り入れることによって、次第に自らのアイデンティティを形成するようになった。

東北（奥州）の民は、「悪路王」などと蔑みの呼称を受けた屈辱をバネとして、鎮守府多賀城とも対抗できるほどの軍事力を備えていった。これが安倍頼時が率いる安倍一族である。この安倍一族の勢力拡大に脅威を感じた畿内政権は、政権内において、武勇に優れた源頼義を鎮守府將軍に任じ、悪戦苦闘の末、やはり東北の出羽地方で、勢力を拡大していた安倍氏と同じく、地元の族長であった清原氏の軍事力を味方につけて、前九年の役に勝利をする。この時、安倍頼時の娘婿だったのが、清衡の父藤原経清（藤原秀郷流の血脈を持つ地方官僚）であり、幼少の清衡

は、清原氏に再嫁した母に連れられて清原氏の一員として育てられる。その後、鎮守府将軍となった清原氏内部で、内乱が起き、清衡はこの内乱において、源義家の支援を受けて、最後の勝利者となる。これが後三年の役と呼ばれる戦争だった。奥州藤原氏初代藤原清衡は、この安倍氏の血と、畿内政権内で特権的存在だった「藤原氏」の血、双方を受け継ぐ、言うならば混血児であった。

平泉という地域は、地政学的に言えば、東北人（奥州人）と「畿内人」がせめぎ合う境界に位置する場所だった。平泉文化の存在意義というものは、とかく、収奪されるばかりだった奥州という「一地方」の人間たちが、徐々に黄金という特産物を経済的背景として、さまざまな学問・宗教・芸術などを学び、そこから自らのアイデンティティを形成し、今日の歴史で、縄文文化と呼ばれる独特の美意識を基盤として、生み出した独自の地方文化である。もちろん、このことの証明は、奈良、京都文化との違いを、通じて行われるものだ。以上、結論で言えば、平和を祈念して開かれた中尊寺供養願文の精神から言っても、東北人の抵抗史の観点からも、悪路王伝説のある達谷窟は、世界遺産「平泉」の遺跡群から外せないのは確かである。ただし、現行の推薦書「浄土思想を基調とした文化景観」という括りで包括することはやっぱり不可能である。

<白鳥館跡>

「白鳥館跡」がコアゾーンに入ったことは、正直驚きであった。もしもこの「白鳥館跡」が入るならば、もっと入れられるべき遺跡はあったはずだ。箱石橋付近で、北上川が蛇行したところにあるこの遺跡のコアゾーン化は、選択ミスと言われても仕方がないと思われる。もちろんこの遺跡をどのように考えても、浄土思想を基調とした文化景観と説明することは不可能である。この遺跡が、世界遺産に登録される普遍的価値を有するものだと説明されても、首を傾げざるを得ない。

<長者原廃寺跡>

衣川地区にある「長者原廃寺跡」は、平泉に先行した安倍氏の居住地「衣川」の中心地を成す、広大な平地で、安倍氏の建てた寺院や居館などが林立していた一等地である。伝承では、金売吉次の居館跡と言われてきたが、衣川に見つかった船着き場跡などにも、近くこの周辺で、北上川から衣川に入ってきた物産の荷捌きや特産物の出荷などが行われた可能性がある。しかしながら、衣川地区の考古学的研究は、都市平泉の範囲の研究の進展同様、さほど進んでおらず、衣川地区の代表として、コアゾーンに選択された感じが強く、「浄土思想を基調とした文化景観」としての証明をせよ、と言われても、無理な話である。むしろ、今後考古学的研究が進んで、都市平泉の範囲が広がった時に、改めて登録する位のスタンスで考えるべきではなかったか。

9 本寺のバッファゾーンは栗駒山から巖美溪まですべきだ

最後の第7の指摘（「構成資産と緩衝地帯との関係について」）は、遺産全体として「全体性」あるいは「完全性」（インテグリティ）の問題が問われていると考えられる。

尚、この「インテグリティ」という概念は、先述したとおり、2005年に改訂された「世界遺産条約履行のための作業指針」にも盛り込まれているもので、「全体が無傷で過不足なく遺産の範囲に含まれているか」を測る物差しだ。

この考え方は、以前には自然遺産についてのみ適用されてきたものだが、2006年の登録案件の審査からは、文化遺産にも適用されるようになった。この考え方を説明すれば、新しい「作

平泉世界遺産入りに赤信号！？(イコモス勧告へのコメント)

2008年6月6日
平泉を世界遺産にする会

業指針」の89条に規定されている通り「文化景観及び歴史的町並みその他の生きた資産については、これらの独自性を特徴づけている諸関係及び諸機能が維持されていること。」である。つまり当該文化遺産が孤立分散した状態ではなく、個々の遺産包含する地域全体が、有機的に結びつきを保ち、総体として持続可能な社会経済システム（自然遺産の場合は生態系）を維持するに十分な広さを確保していることが大事であるということになる。

そこで先の5月23日のイコモスの「登録延期勧告」である。この中で、イコモスは「平泉では、自然の地形を存分に活かしつつ、浄土思想に基づき完成された政治・行政上の諸施設とその周辺の農村が比較的小規模な空間に濃密に展開し、総じて浄土思想を基調とする良好で優秀な文化的景観が形成された」としているが、「推薦資産は、個々の構成資産間の空間的繋がりを含む文化的景観の総体というよりも、個々の構成資産に限定されており、推薦資産の主題と推薦資産・緩衝地帯の区分の在り方との関係について整理が不十分」と指摘している。

この指摘は、平泉の登録遺産の評価にとって、実は決定的な問題の指摘と考えられる。というのは、登録しようとする資産について、推薦書は、これを全体として「浄土思想を基調とした文化景観」と規定しながら、その実、浄土思想とは、縁もゆかりもない遺跡のいくつかを個別に追加させたことにより、遺産登録の真正性の証明が難しくなったばかりか、全体としての統一を欠き、結果として、コアゾーンとした遺跡の周辺を漠然と、バッファゾーンとして線引きしたに過ぎないと判断しているのではないかと考えられる。

例えば、骨寺荘園遺跡のコアゾーンとバッファゾーンを見ると、骨寺地区の田園をコアゾーンとして、吾妻鏡に表記された境界である「東の鎰懸（いつかけ）」、「西の山王の窟（いはや）」、「南は岩井河」、「北は峯の山堂の馬坂」までの東西南北のみをそのまま、線引きした形に見える。

しかし何故奥大道にあった景勝地巖美溪から磐井川沿いに西に延びる川と古道をバッファゾーンから外し、骨寺遺跡を孤立させる形で、コアゾーンとしたのか、その理由が釈然としない。

磐井川に沿って走る道は、須川嶽と呼ばれた栗駒山に通じる古道であり、栗駒山までの道程をバッファゾーンとして保護したとしても、何ら不自然ではない。むしろ生きた農業遺跡である骨寺の文化景観は、栗駒山を借景として、それとこの磐井川とそれに沿って西に走る古道によって維持されてきたものである。だとすれば、骨寺荘園遺跡を総体として今後維持保全するためにも、もっと広範囲な形でバッファゾーンが規定する必要があったのではないだろうか。

また東稲山がバッファゾーンから途中で切られているのも不自然。さらに松尾芭蕉が、平泉やってきたことを示す一関から平泉への奥州街道の道程もまた都市平泉のバッファゾーンとして保全すべきで地域と思われるが、これも中途半端な感じを受ける。

遺跡のコアゾーン周辺には、例えば柳の御所跡周辺の「平泉バイパス」という傷口が存在し、無量光院の遺跡を横切る形で、東北線の線路が敷設されている。また金鶏山だけではなく、コアゾーンが点在する平泉の中心部には、高圧電線の鉄塔が、点在するなどしている。結局、これはバッファゾーンがバッファゾーンとして機能せず、コアゾーンの価値を落とし込める存在となっていることもあり、インテグリティの観点から、早急な修景プランが示されるべきである。

また街並みも、世界遺産の町として、人を惹きつける雰囲気ある景観とは、お世辞にも言い難く、世界遺産登録される街並みとしての全体的統一感や品格に欠けるものがある。

大切なことは、遺産のコアな部分を適切なバッファゾーンを規定して、普遍的価値の保護を計ることであるが、残念ながら平泉においては、「柳の御所遺跡」に典型的に顕れているように、遺産の価値が、不適切で過剰な公共工事によって、劣化というよりも、傷つけられているのである。さらには、南の太田川の堤防、北の衣川の巨大なコンクリートの堤防工事による景観の破壊も進んでおり、往時にあった水辺の都市としての「苑池都市的な景観」を想像することすら、極めて困難な状態になってきている。イコモスのインティグリティの観点からの指摘は、平泉の文化的景観の根幹に関わる指摘であり、今回のイコモスの指摘を謙虚に受け止めるべきである。

結び 平泉の価値は不変（急がば回れ）

以上、イコモスの勧告書にある「登録延期」の根拠となる7つの問題について、これを検討してきた。言えることは、平泉ほどの文化をひとつの概念「浄土信仰」などというもので、一括りにすることは難しいということだ。もっと言えば、「平泉の文化」が内包している普遍的価値そのものが「浄土思想」という小さな空間に納まりきるものではなく、もっと奥深く、しかも多様で重層性をもった文化の集合体ではないかと思うのである。

私が敬愛する芸術家村山直儀画伯は、金色堂を前にして、ただ一言「エジプトやギリシャに通じる深いものを感じる」と言って絶句されたことがある。確かに金色堂の内陣中央の須弥壇を見れば、阿弥陀如来が中央に鎮座している。なるほど、それだけを取れば、この御堂は阿弥陀堂であり「浄土思想」ということになる。しかし少し視点を変えて、その内陣を支える丸い柱の意匠や模様を考えれば、シルクロードを通じて運ばれた西洋と東洋の文明の融合が見事に表現されているように見える。

あの豪華な内陣を支える4本の巻柱を見ると、大きさはともかくギリシャやローマの神殿の柱を連想させるものがある。柱には、ある金細工や螺鈿細工が施されているが、さまざまな貝の中で、一際目立つのは、暗がり妖しげに光る夜行貝である。この貝の原産地は、アフリカと見られ、昭和大改修と言われた金色堂の改修（1962）では、夜行貝だけで、580を越える数が必要だったと報告されていることだ。平泉という地勢を考えれば、清衡が独自の海洋ルートを確保し、黄金の産出という経済力を背景にして、世界最高水準の物産などを確保していた事実が裏付けられるのである。

あの松尾芭蕉は、奥の細道の旅の中で、この金色堂で、かの有名な、

五月雨を降り残してや光堂

と詠んだが、実はもうひとつ、次のような幻想的な句を詠んでいる。

螢火の昼は消えつつ柱かな

奥州藤原氏が滅ぼされて500年目の五月、芭蕉はこの金色堂に入った。その時芭蕉の目に入ったものは、やや光の失せた頹廢の影であった。螢のような光が、柱から浮かび上がったように、芭蕉には見えたのであろうか。

この句の解釈について、俳人加藤楸邨氏（1905－1993）は、「莊嚴を極めた柱も今は七宝散り失せ、金の柱も霜雪に朽ちて、まるで螢火が昼は光を収めているような感じだ」と解し

平泉世界遺産入りに赤信号！？(イコモス勧告へのコメント)

2008年6月6日
平泉を世界遺産にする会

た上で、小倉百人一首（四九首）の「みかきもり衛士の焚く火の夜は燃え昼は消えつつものをこそ思へ」を契機とした発想（加藤楸邨著「芭蕉全句（中）ちくま文庫 1998年刊より）としている。

鋭い指摘だ。芭蕉は、この金色堂に入った瞬間、灯明の光が柱に鏤められていた夜行貝に反射して鈍く光るのを目にした時、往時の金色堂と繁栄を極めていた都市平泉のイメージが、心の奥で甦ったのである。要は芭蕉の目には、普通感覚では、見えないはずのものが見えたのである。それは柱に鏤められた夜行貝が放つ鈍い光が、藤原三代の黄金文化の不滅を映す光のように見えたということになる。もっと言えば、芭蕉は金色堂に不滅の光（普遍の価値）を見て、最後に先の「五月雨を降り残してや光堂」をのみを、「奥の細道」に遺して、これを決定稿としたのである。

最後に、逆転登録について言えば、かなり厳しいと思われる。わが国が、昨年度をもって委員会国21ヶ国から外れたこともある。したがって、昨年度の石見銀山のようには行かないとみるべきだ。

またこのところのユネスコが、世界遺産登録に関して、厳しい選別のスタンスを取っていることもある。審査基準にも、2005年以降、「真正性（オーセンティシティ）」や「完全性（インテグリティ）」の物差しが導入され、あらゆる方面から、その遺産の普遍妥当性が詮議されるようになってきている。

今回の平泉の「登録延期勧告」は、推薦書の扉に当たる「浄土思想を基調とした文化景観」そのものものと現物の遺跡の矛盾が指摘されているという致命的な側面をもっている。

このことを考えるならば、もう一度、平泉文化の価値を、その根本から見直すことが、一見遠回りに見えるかもしれないが、後でふり返れば近道だったということになるかもしれない。

2008年6月6日

平泉を世界遺産にする会
代表世話人 佐藤弘弥